

おもさ（衡）

重さをはかるには、はかりを使います。

メートル法以前のはかりの単位には貫・もんめなどがあり、はかるモノの重さに合ったさまざまな大きさの分銅やおもりがありました。

当時はおもに、一点で支える棒の両端の皿にモノと分銅をのせ、釣り合わせてはかる「てんびん」や、目盛りのあるさおの一方にモノをかけ、片方のおもりを動かして水平になったところで、さおの目盛りではかる「さおばかり」がありました。てんびんは銀貨などの両替などに使われ、持ち運びに便利なさおばかりは商売など広く一般に使われました。



さおばかり

江戸時代、さおばかりは重さの基準を統一するため、江戸と京都に「はかり座」を置いて、製造・販売・修理が行われ、また

にせ物や不正確なはかりを取り締まる「はかり改め」の検査もありました。

明治時代以降、ばねばかりなどが加わりました。現在は、目盛り式からデジタル式のはかりが多くなってきています。

単位 今・むかし

長	1分 <small>ぶ</small> (=10分の1寸)	3.03mm
	1寸 <small>すん</small> (=10分の1尺)	3.03cm
	1尺 <small>しゃく</small>	30.3cm
	1間 <small>けん</small> (=6尺)	1.82m
	1丈 <small>じょう</small> (=10尺)	3.03m
	1町 <small>ちやう</small> (=60間)	109.09m
	1里 <small>り</small> (=36町)	3.93km
さ	※鯨尺の1尺は37.88cm	
重	1分 <small>ぶ</small> (=10分の1匁)	375mg
	1匁 <small>もんめ</small> (=1000分の1貫)	3.75g
	1斤 <small>しん</small> (=100分の16貫)	600g
	1貫 <small>かん</small>	3.75kg
か	1勺 <small>しやく</small> (=10分の1合)	18.04ml
	1合 <small>ごう</small> (=10分の1升)	180.39ml
	1升 <small>しょう</small>	1.8ℓ
	1斗 <small>と</small> (=10升)	18.04ℓ
さ	1石 <small>いし</small> (=10斗)	180.39ℓ
面	1歩 <small>ぶ</small>	3.31㎡
	1畝 <small>せ</small> (=30歩)	99.17㎡
	1反 <small>たん</small> (=10畝)	991.74㎡
	1町 <small>ちやう</small> (=10反)	9917.36㎡
積	※1歩は1坪ともいう。また、反は段とも書く。	

注) 長さ、かさ、面積は少数第3位を四捨五入したものです。

学習の手引

第25号

ながさ・かさ・おもさ

～度量衡～



さらばかりで魚をはかる

(写真協力 南区 中尾静子さん)

広島市郷土資料館

☎734-0015 広島市南区宇品御幸二丁目6番20号

TEL (082) 253-6771

FAX (082) 253-6772

はかり（度量衡）について

私たちは、日常生活の中でモノのながさ・かさ・おもさをはかることに多く出会います。はかるとは、ある一定の基準単位を設けて、はかるモノとの比較をすることです。この基準が不正確であると、モノの売買やモノの証明をするときに混乱の原因となってしまう。

はかるとは昔から政治、経済に大きく関わっていたことから、時の支配者によって単位や計量器具が統一されたり、また変更されてきました。

わが国では長い間、ものさし・ます・はかりなどの計量器具が使われ、その単位としては、長さに「尺」、重さに「貫」を基本とする尺貫法が使われました。

しかし、明治24（1891）年、国際的に定められたメートル法（1875）と尺貫法の両方を認める「度量衡法」が公布されました。

その後昭和41（1966）年、現在のようなメートル法の完全使用が実施されました。

さらに国際的に分かりやすく、使いやすい単位（S I）が今、考えられています。

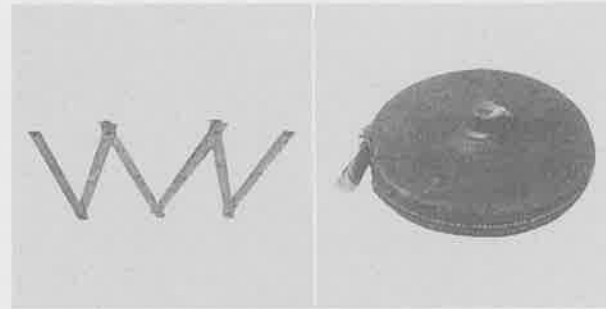
ながさ（度）

長さをはかるには、ものさしを使います。ものさしの種類は使う目的によって形もさまざまで、竹尺、曲尺、巻尺、折尺などがあります。

昔は、ものさしの単位には尺・寸・分など、距離の単位には里など、土地の面積には反・歩などがあり、裁縫や土木建築工事、田畑の検地（測量）などの表示に使われました。

折尺

メジャー



江戸時代、ますやはかりは幕府の規制を受けましたが、寸法の統一がよく保たれていたものさしには規制がありませんでした。

なお、長さに関しては、昭和34（1959）年、現在のメートル系目盛りが一般化されました。

かさ（量）

かさをはかるには、古くから数量の違う四角い大小のますが使われ、液体や穀類をすりきり一杯にしてはかっていました。



かさをはかる単位には、斗・升・合などがあるものの、地方ごとにますの大きさが違い、長い間なかなか統一されませんでした。豊臣秀吉によって京都で当時使用されていた「京ます」に統一されました。これを受け継ぎ江戸時代には、京ますをやや大きくした現在の大きさに統一し、江戸と京都に「ます座」をおいて、ますの製造・販売・取り締まりが行われました。

ますは正確にはかることが難しく、メートル法以後、次第に使われなくなりました。